

村山槐多の関連写真二枚（「本社主催壮快旅行」）

● 出典

無署名「本社主催壮快旅行」（『武侠世界』第三卷第一〇号、武侠世界社、一九一四年九月一日、口絵「頁数無表記」、表題は目次では「本社主催夏期^て壮快旅行」になっている、写真撮影者不明「本稿一一頁参照」）

● 寸法

「庚申山社務所に於ける一行」 六・七〇×一一・八〇センチメートル

「華巖の瀑と押川主筆」 九・八〇×六・三五センチメートル

「中禅寺湖上の船遊」 六・七五×一一・八〇センチメートル

● 解説

村山槐多は一九一四（大正三）年八月一九日の長谷部武二郎氏宛書簡の中で次のように書いて^{（註一）}いる。

さる六日から四五日武侠世界の連中と日光、足尾を見て来た。

中禅寺湖は実に善かった、

来月の武侠世界にはその記事に僕が挿画を入れた、下らない仕事だが見て呉れたまひ^{（註二）}。

今回の資料は右の書簡の中で言及されている旅行において撮影された写真である。書簡によれば、槐多は一九一四（大正三）年八月六日から旅行に出かけたことになる。槐多は一八九六（明治二九）年九月一五日生まれなので、この時には満年齢で十七歳、数え年で十九歳であった。旅行の予告記事が載った一九一四（大正三）年八月一日発行の『武侠世界』第三卷第九号には、出発日に関する記述は四箇所あり、それぞれ「八月六日」^{（註二）}（二箇所）、「八月初旬」^{（註三）}、「六日」^{（註四）}とされている。そして、同年九月一日発行の同誌第三卷第一〇号に旅行の記事が載り、^{（註五）}槐多以外の参加者も「八月六日」が出発日だと書いて^{（註六）}いる。したがって、その日に出発したことは疑いなくはずである。ところが、『村山槐多全集増補版』^{（註七）}所載の槐多の同日の山本二郎氏宛書簡には「今夜は早雲公のうちへ退屈だから来て居る」と書かれており、旅行に出かけていることと矛盾するが、『槐多の歌へる』^{（註八）}所載の同じ書簡の時期は一九一四（大正三）年六月六日となっている。おそらく書簡の時期は後者が正しく、前者が間違っているのだろう。

次に、先述した『武侠世界』第三卷第九号所載の予告記事を紹介しておく、まず、七
一〇七六頁に「奇峰庚申山と天地人の怪窟」^(註九)という記事が見られる。その冒頭の部分^(註一〇)を以
下に引用する。

我徒は八月初旬猛暑を冒して奇山怪窟を探らんとす。名にし負ふ庚申山は八犬伝に於
て其怪異を伝ふ、石門の奇暗窟の怪、壯絶快絶譬ふるに物無けん。更に足尾の見学日
光の清遊に至つては一段の興趣を添ふるもの。請ふ先づ馬琴の名文庚申山の一條を
^(註一一)
読め!

これに続く曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』^(註一二)からの引用文は長いので、ここでは省略する。
その後には「足尾見学と日光の清遊」^(註一三)と題する文章があり、今回の旅行について簡単に説
明されている。

犬飼現八の射止めたる妖怪こそは実に彼の赤岩一角を喰殺して、自ら一角に化け其
家を横領したる野猫であつたのである。吾徒は七寸の草鞋に此奇山を探検せんとする
のである。

上野発は六日午前七時、鉄道院に交渉して一箱を占領し、押川団長、小杉針重の社
同人は元より、清、小鰐、頑鉄、河野其他の天狗連殊に長岡からは例の大村花和尚が
^(註一四)
上京て来て何かと世話を焼く筈。それに読者諸君の多数があるから、汽車の中さへ愉

快な事は請合である。一行は午後二時半に足尾に着し直に犬飼現八が妖怪を退治した彼の庚申山に登るのである。庚申山の怪門奇窟を充分に探検して妖魔を追払ひ、其山上の宿屋に一泊する。

そして其翌未明に山を下つて足尾に引返し足尾銅山の見学に移る。銅山には既に本社から交渉がしてあるから、丁寧にして親切に案内をしてくれる筈である。又希望で坑内に這入つて見る事も出来るから、学術上から云つても大に利する処があるだらうと思ふ。其処を見て直に蚤脚を利用して山を越え中禅寺に向ふのである。此処に就ては今更云ふまでもない事である。其処に一泊翌日は湖上に船を浮べ或は景勝を探つて前日の疲労を慰し、其夜日光にて大懇親会を開き翌日開散。

この記事の二〜三頁目に相当する七二〜七三頁に、「(註一五) 武侠世界社天狗倶楽部發起暑中壯快旅行」という別の記事が載っており、旅行の詳細が説明されている。表題に続いて次のような文章がある。(註一六)

天下の健児は来れ〓八月六日午前七時東都上野駅出発〓当日八犬伝に名高き庚申山の
險奇を探つて山中宿舎に一泊〓翌七日足尾大銅山見物〓長駆して翠巒碧水の中禅寺湖
畔に一泊〓八日午前湖上の舟遊〓午後華嚴の瀧等名勝を見物しつゝ日光行〓同夜日光
一泊痛快なる大懇親会開催〓九日午前日光にて旅行隊解散各人自由行動を取る(同地
より直ちに帰京するも可也。他方面に随意旅行を為すも可也。(註一七) 会費金五円(但し日
光解散後帰京の汽車賃を含まず。会費に剰余を生ぜし時は会計報告と共に割戻す。(註一八)

参加希望者は八月三日迄に本社吉岡信敬宛申込を要す^(註一九) 多少蠻的旅行なるを以て羸弱旅行に堪えざる人は謝絶す^(註二〇) 即ち健康調査の必要あり八月三日四日の両日午後会費持参本人直接御来社ありたし^(註二〇) 成るべく草鞋脚絆の軽装を要す^(註二〇) 詳細は本社旅行係(電話番町二二八一)へ照合せらる可し。(出発は晴雨不拘決行)

右のような文章の後に横書きで「委員」とあり、その下に委員の名前が上下二段に分かれて縦書きで列記されている。^(註二一) 上段には「旅行隊長 押川春浪」、「司令長官 大村一藏」、「同 弓館小鱈」とあり、下段には「兵站部長 小杉未醒」、「同 橋戸頑鉄」、「会計部長 針重敬喜」とある。「委員」の名簿の左側には「^(註二二) 其他委員武俠世界社天狗倶楽部員数十名^(註二二)」と「天下の健児は参加せよ!」^(註二三) という二行のテキストがあり、それを最後にしてこの記事は終わっている。

また、同誌一三二頁所載の「^(註二四) 編輯室より」という記事にもこの旅行への言及が見られるので、当該箇所を引用しておく。

八月六日に出発、庚申山を探検し、足尾の銅山を見学し、更に日光中禪寺に舟を浮べて悠遊する本社主催の大旅行は、近頃珍らしい^(註二五) 壮挙で、壮快言語の外だと思はれる。例の天狗の豪傑連も一所に行くさうであるから、どんな事をするか判らない。面白い面白い。

そんな斯んなで、社内一同の元氣頓に昂り単に之等の活動ばかりではなく、紙面にも大改良を加へて益々諸君の交誼に酬ゆる所あらんと企図して居る。論より証拠本誌を御覽ありたいものだ^(註二五)

なお、前号の『武侠世界』第三卷第八号に載っている同じ表題の「編輯室より」^(註二六)という記事にも、直接の言及こそないものの、この旅行と関係があるのではないかと思われる記述があるので、その部分を引用しておく。

社同人涼しい椽側^(註二七)に集まつて、『何うだ暫らく痛快な事をやらんが、一つ此暑中休暇に同志を集めて、何か痛快な事をやらうぢやないか』『宜からう。何か一つやらう無闇に痛快な事をやらうぢやないか』と早速相談一決したが、偕何をやり出すか。之れは公式に発表する迄、預かつて置かう。

炎威愈猛烈となつて来るが、我々も亦愈猛烈にやるつもりだ暑熱などに閉口して居るやうでは何事も出来ない、読者諸君お互に確かりやらうぢやないか^(註二八)

旅行への参加者は、水谷竹紫が書いた旅行記の末尾に掲げられているリストによれば、^(註二九)
「榊原栄一」、 「松本長一郎」、 「岩本民徳」、 「石川金五郎」、 「鴉田文材」、 「鶴岡春三郎」、 「太田貞吉」、 「太田孝」、 「太田忠」、 「城所豊蔵」、 「和田堅次」、 「太田重雄」、 「森岡一成」、 「遠藤盛弥」、 「中川悦太郎」、 「松島唯雄」、 「池谷増蔵」、

「青戸如風」、「小島忠三郎」、「東條旭」、「佐伯唯一」、「村山槐多」、「押川春浪」、「大村一蔵」、「水谷竹紫」、「弓館芳夫」、「押川清」、「針重敬喜」、「奥村卯兵衛」、「西川独居子」の三十名である。

『(註三〇) 武俠世界』第三卷第一〇号に旅行についての文章を寄せているのは、「押川春浪」(二〇～二二頁)、「弓館小鱈」(二二～二三頁)、「針重敬喜」(二三～二五頁)、「水谷竹紫」(二五～二七頁)、「遠藤盛弥」(三三～三四頁)、「冷灰」(三四頁)、「森岡一成」(三五頁)、「小島靖弘」(三五～三六頁)、「鶴岡生」(三六頁)、「村山槐多」(三六頁)、「榊原栄一」(三七頁)、「城所豊蔵」(三七頁)、「石川金五郎」(三七～三八頁)、「太田孝」(三八頁)、「民徳」(三八～三九頁)、「和田生」(三九頁)、「しげを」(三九～四〇頁)、「西川独居子」(四〇頁)、「鶴田天材」(四〇頁)、「東條旭」(四〇～四一頁)、「太田忠」(四一頁)、「池谷生」(四一頁)、「青戸如風」(四二頁)、「奥村二秋」(四二頁)、「松本芳山」(四三頁)の二十五名である。

参加者のリストと文章の執筆者名の両方に共通する人名は、「青戸如風」、「石川金五郎」、「遠藤盛弥」、「太田孝」、「太田忠」、「押川春浪」、「城所豊蔵」、「榊原栄一」、「東條旭」、「西川独居子」、「針重敬喜」、「水谷竹紫」、「村山槐多」、「森岡一成」の十四名である。

「池谷増蔵」と「池谷生」、「岩本民徳」と「民徳」、「太田重雄」と「しげを」、「鶴岡春三郎」と「鶴岡生」、「和田堅次」と「和田生」の五組は、参加者のリストにおいてはきちんと氏名が書かれているが、文章の執筆者名においてはそのどちらかが省略されているため、名前が完全には一致しないもの、いずれも同一人物ではないかと思

われる。(註三一)

また、「奥村卯兵衛」と「奥村二秋」、「松本長一郎」と「松本芳山」、「弓館芳夫」と「弓館小鰐」はそれぞれ姓が一致するので、参加者のリストにおいては本名が書かれ、文章においては号で署名されたのではないか。この三組は同一人物だと考えてよいだろう。以上をまとめると、参加者のリストと文章の執筆者名の間で同一人物だと分かるのは合計二十二名である。

逆に、同一人物かどうか分からないのは、リストからは「太田貞吉」、「大村一蔵」、「押川清」、「小島忠三郎」、「佐伯唯一」、「鶴田文材」、「中川悦太郎」、「松島唯雄」の八名、文章の執筆者名からは「小島靖弘」、「鶴田天材」、「冷灰」の三名が挙げられる。

リストの「小島忠三郎」と文章の「小島靖弘」は、姓は同じだが名が全く違うので、別人なのかもしれないが、詳細は不明である。

リストの「鶴田文材」と文章の「鶴田天材」は、姓と名（または号）のどちらも異なるが、「田」と「材」が一致するなど、字が似ているので、同一人物である可能性はあるだろう。

文章の「冷灰」は「三州豊橋の住人」^(註三二)なので、リストの八名の当時の居住地が分かれば、その中の誰かが「冷灰」であるのかが判明するが、筆者はそこまで研究できていない。^(註三三)

もし、「小島忠三郎」と「小島靖弘」、「鶴田文材」と「鶴田天材」がいずれも同一人物で、「太田貞吉」、「大村一蔵」、「押川清」、「佐伯唯一」、「中川悦太郎」、「松島唯雄」の中の誰かが「冷灰」であるのなら、以上の十一名分の人名は、実際には合計八名の人物により構成されていることになり、反対に、上記の人名が悉く別人のものである場合には、当然ながら合計十一名の人物により構成されていることになる。

したがって、リストと文章の執筆者名から分かる参加者の人数は、先述した二十二名と合わせると、全体で三十名〜三十三名だということになる。

次に、各文章における参加者についての記述に注目すると、合計人数は「三十余名」^(註三四)と書かれている。旅行の途中の時点での人数としては、出発日（一九一四年八月六日）に上

野駅に集ったのは「無慮三十名」^(註三五)であり、二日目（七日）の朝に押川春浪を除く一行が山

登りをした際には「二十余人」^(註三六)である。それから、庚申山からの下山途中に青戸如風、

「小川」^(註三七)、松本長一郎（松本芳山）の三名が加わり、これによって「総計二十九人」^(註三九)にな

ったという。この三名の中で「小川」だけは参加者のリストと文章の執筆者名のどちらにも名前が出てこないのが重要である。その後、足尾銅山を見物してから太田貞吉が帰った^(註四〇)。

翌日の三日目（八日）に中禅寺湖上に遊んだ際の人数は「三十人」^(註四一)と書かれている。その

後に奥村卯兵衛（奥村二秋）^(註四二)が合流している。こうしてみると、人数についての記述には互いに矛盾するところもあるので、あまり信用できるものではないかもしれない。

一方、既に紹介した『武侠世界』第三卷第九号所載の記事を振り返ってみると、「奇峰庚申山と天地人の怪窟」という記事において、「押川団長、小杉針重の社同人は元より、清、小鰐、頑鉄、河野其他の天狗連珠に長岡からは例の大村花和尚が上京て来て何かと世話を焼く筈。」と書かれている。既に分かっている参加者の名前から推測すると、「押川団長」は押川春浪、「針重」は針重敬喜、「清」は押川清、「小鰐」は弓館小鰐、「大村花和尚」は大村一蔵かと思われる。また、これまでに引用した他の記事に基づくと、「小杉」は小杉未醒^(註四三)、「頑鉄」は橋戸頑鉄かと推測できる。「河野」だけは他の記事に名前が見えないが、これは天狗倶楽部の一員であった河野安通志^(註四五)であろうか。

「武侠世界社天狗倶楽部発起暑中壮快旅行」という記事においても、旅行の「委員」として、「押川春浪」、「大村一蔵」、「弓館小鰐」、「小杉未醒」、「橋戸頑鉄」、「針重敬喜」、「其他委員武侠世界社天狗倶楽部員数十名」が挙げられている。

また、「編輯室より」という記事にも、「例の天狗の豪傑連も一所に行くさうであるから、どんな事をするか判らない。」と書かれている。

上記の三件の記事にある「其他の天狗連」（「大村花和尚」を除く）、「其他委員武侠世界社天狗倶楽部員数十名」、「例の天狗の豪傑連」については、具体的に誰であるのかはよく分らない。^(註四六)ただし、二件目の記事に旅行の申し込み先は「吉岡信敬」と書かれているが、吉岡は天狗倶楽部の一員であったため、^(註四八)彼がそれらの中に含まれる可能性はあるかもしれない。

「奇峰庚申山と天地人の怪窟」と「武侠世界社天狗倶楽部発起暑中壮快旅行」に名前が書かれている人物の中で、「河野」、小杉未醒、橋戸頑鉄、吉岡信敬の四人は、『武侠世界』第三卷第一〇号に掲載された参加者のリストと旅行についての文章において、参加者だという記述が見られない。小杉未醒は、押川春浪の旅行記において、この旅行が企画された経緯に触れられている箇所^(註四九)に登場するのみであり、残りの三人はどこにも名前が出てこない。したがって、この四人が旅行に参加したかどうかは不明である。

以上に基づいて総合的に考えると、旅行の参加者としては、そのリストと文章の執筆者名から分かる三十名と三十三名と、二日目の朝から合流した「小川」に加えて、以上に名前は挙がっていないが『武侠世界』第三卷第九号において参加者として予告された天狗倶楽部のメンバーを想定することができるが、その他にどこにも名前が書かれていない人が含まれる可能性もあるだろう。この中で確実に参加したといえるのは、参加者のリストと文章の執筆者名から分かる最少人数である三十名に「小川」を加えた三十一名である。旅

行についての文章における人数に関する記述はいずれも三十人以内になっているので、上記の三十一名以外にあまり多くの人が参加したとは考えにくく、いたとしても数名だけだったのではなからうか。もしいたのだとすれば、そのうちの一人が文章の執筆者の中で誰であるのかが分からない「冷灰」に相当する可能性もあるだろう。

さて、ここでようやく今回の三枚の写真の解説に入るが、「庚申山社務所に於ける一行」は旅行の初日（一九一四年八月六日）か二日目（七日）^{（註五〇）}、「華巖の瀑と押川主筆」は三日目（八日）^{（註五一）}、「中禅寺湖上の船遊」も同じく三日目^{（註五二）}にそれぞれ撮影されたのではないかと考えられる。

撮影者については、どの写真も無表記なので不明だが、太田孝の感想文に「無銭旅行者然たる大村地質学者が写真熱と、それに対するモデル連中のストライキ。」という記述がある^{（註五三）}ので、もしかしたら大村一蔵であるのかもしれない。ただし、「庚申山社務所に於ける一行」は、左端に写っている人物が大村であるように見えるので、他の人が撮った可能性もある。また、「中禅寺湖上の船遊」も、中禅寺湖での遊泳について、水谷竹紫の旅行記に「大村花和尚と僕はこれをレンズに納めるに忙しい。」とある^{（註五四）}ので、大村と水谷のどちらかが撮ったのではないかと考える方がよさそうである。

三枚の写真のうち、「庚申山社務所に於ける一行」と「中禅寺湖上の船遊」には槐多が写っている可能性がある。前者はある程度各人の顔立ちが分かるので、部分拡大写真において赤線で囲んだ三人（特に最前列の人物）が槐多である可能性があるのではないかと思われるが、これはあくまで筆者の推測であり、確証はない。後者は各人の顔が見えないので、個人の特定は困難であり、槐多が写っているかどうかは不明である。もし写っているのだとしても、どの人物が槐多であるのかは分からない。

執筆者・発行者 植田智晴

二〇一三年二月二〇日 初稿発行

二〇一三年六月二二日 第二稿発行

二〇一三年十二月一六日 第三稿発行

© UEDA Tomoharu 2013-2023

この PDF の無断での転載、複製などは禁止とさせていただきます。